

思春期・青年期男子の「性の語り」とその対応 電話相談からの一考察

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

思春期を対象とした電話相談は、チャイルドライン、保健医療施設（保健所・産婦人科・泌尿器科・精神科等）に開設された部門等多々ある。またその報告としては、活動に関する現況報告が殆どであり、相談の内容に関する研究についてはまだ少ない。本研究は、思春期・青年期を対象に、性についての語りが、電話相談に何を求めてかけているのか、電話相談の果たす機能を元に会話分析を行い、その対応について考えることを目的とした。

大阪NPOセンター会員のボランティア団体である「ハートブレイク」における「思春期のこころ&カラダ・性の電話相談」を平成7年の阪神大震災後、子ども達の不安や悩みをいろいろな視点から「少しでも和らげたら」という主旨で、同年12月から神戸市で電話相談を始めた。平成13年11月より大阪市に事務所を移転した。筆者は、平成11年から電話相談を中心に参加している。電話は、ITに近似して匿名性が高い手段であり、思春期・青年期の相談者が安心して気軽に利用できるが、性行動に関する相談には目的が隠されている場合がある。また電話相談の機能として、マクシン・ローゼンフィールドは、助言・擁護・情報提供・カウンセリング・支援・ビフレンディング等を示しており、性に関する相談の問題と相談機能を再検討する。電話を通じての相談者の語りは、ファンタジーとして強化される危険性を持つが、その強化因子について、相談員との相互作用から会話分析する。会話分析の研究対象は、社会的行為の秩序・組織・規則性であり、相互行為のなかに構造を見出し方法的な手続きと規則性が創造されるメカニズムを見つけ出す。思春期・青年期の男子が電話相談に何を期待し、性行動の意志決定や情動のコントロールにおける、対人援助の一助として成り得るのか検討する。

研究方法は、思春期・青年期の男子を対象として、ハートブレイクにおける電話相談から、2000年4月～7月まで録音テープに収録した中から、52事例の録音テープによる会話をデータ化した。その相談カテゴリーから、電話相談を受けた思春期・青年期の男子の相談として、セクシュアリティの発達に関連した相談や、語りの導入に比較のみられる事例を中心に選択した。倫理的配慮として、録音テープの使用に際しては、NPO/ハートブレイクの責任者及び相談員に研究の主旨から許可を得ている。相談者は匿名であるが、さらに断定できるものはプライバシー等に不利益がないよう配慮した。

その結果及び考察について、10事例の会話分析から、相談者と相談員の相互行為について考えた。相談者は真に性の相談を目的としているかについて、「あの：、ちょっと」と「言いよどみ」は相談者の苦しみや感情を知る手がかりとなるといわれ³⁾、そのやりとりがあって相談に入るケースについては、性器の大きさや包茎、マスターベーションについての基礎的知識に関わる相談が多く、相談者と相談員の相互作用から助言、情報提供、支援的な相談関係のシステムが整っていくケースが殆どである。とりあげた事例については、作話とすぐに断定できるような文節は見あたらなかった。しかし猥褻な性描写や、明らかに

マスターベーションを行っているような息遣いの電話を受ける場合がある。その際相談員は、電話の具体的な目的が何であるのか、テレホンセックスやセックス通話者（電話による性的刺激を求めるだけのものや性的空想を繰り返し話すことで性的刺激を得る目的¹）を予測できたとしても、その目的について確認するように対応する。しかし目的を確認するような問いかけの途中で、電話を切ってしまう例もある。聞く耳をもつ相談者には、自分の欲求を優先させたままの性行動がもたらす、他者や社会への影響について考える機会となるような対応を心がける。またマスターベーションを行う際のエチケットや方法等まで話し合うこともある。セクシャルファンタジーを判断できる言葉や表現については、どの場合も、相談者が十分話すまで待つのは当然であるという姿勢を保っている。しかしこちらが相談目的を確認しても自分のペースで話を変えない等目的不明の場合や、作話、ファンタジーが断定できる場合は、時間の設定や境界線をきちんと説明し、こちらの態度を伝えることが必要である。そのことは、作話やファンタジーを広げるチャンネルの防止にも繋がると考える。会話分析で見えたものは、問題行動といわれる下着泥棒や近親姦、若年者との交渉における相談は、作話やファンタジーの可能性はあるが、否定的な対応の相談方法は取らないよう心がける。むしろ相談者の支援的な立場を保ちながら、会話の相互行為に連鎖を形成し秩序を見出すことにより、会話を成立させるための努力をしている。この相談員とのやりとりから、自分の行動を客観的な立場で振り返るきっかけになると考える。またすぐに対策や修正を行うような言葉はないにしても、相談員との相互行為により一時的に視点が変化していると思われる。しかし、相談者を過度に肯定的に受け入れる姿勢を示したり、相談員の男性観、女性観が情報や示唆に現れることも、相談者が影響を受けると認識して対応することが必要である。

以上から、特に性を扱う機関については、倫理的側面を常に意識し、相談者以外の存在についての配慮も怠らず、成長・発達途上であることも踏まえて、今後の社会行動に対する道標的存在としての自覚を持つことが必要である。

《キーワード》セクシュアリティ 思春期・青年期男子 電話相談 性の語り 会話分析